

日本語学習者のための電子辞書の試み

リュブリャーナ大学文学部日本語講座
フメリャク寒川クリスティーナ

1. はじめに

リュブリャーナ大学では日本語の学生と一緒にハイパーテキストとして検索できる日本語とスロヴェニア語の学習者のための辞書を作っている。本稿では、その電子辞書の形態、内容、編集方針と計画を紹介する。

2. 辞書作成の背景

現在、簡単な語彙対照表を除けば、日本語とスロベニア語の辞書はまだ存在しない。5年前からリュブリャーナ大学文学部内にできたアジア・アフリカ研究学科日本語講座の学生は英和英辞典などの参考書を使っているが、やはり母語でない英語を通して日本語の単語や用法を調べるのに無理がある。このことは学生の作文や翻訳文からもあきらかである。しかしこれと同時に、日本語とスロヴェニア語の辞書の利用者、つまりスロヴェニア人日本語学習者（当学科の学生の約200人と民間の語学学校の学習者数人）や旅行者の人数を考えると、日本語スロヴェニア語の辞書編集は利益の得られる企画になりかねるので、商業的に出版される見込みはない。そこで、日本語講座では学生の力もかりて辞書を作ることにした。

3. 辞書の内容

日本語学習者のための辞書に望まれる内容は、これについての論文（国広1980、玉村1990、1995、シャープ1993、中道1983、1991など）をまとめてみると、以下のものがあげられる。矢印の項目は、その項目から関連する項目への参照も望まれるという意味である。

- 漢字：1. 表記：書き順、画数、部首
2. 音訓読み
3. 基本的意味（スロベニア語訳）
4. 熟語（→）
- 単語：1. アクセント
2. 表記：かな、漢字（→）送り仮名
3. 文法：品詞（ス訳との相違の場合は注記）
動詞・形容詞の活用形と結合価（構文）
使用制限：文末制限など
4. 意味：日本語による定義（基本義から派生義へ）
スロベニア語訳
類語とその使い分け（→）
対義語、上位語、下位語（→）
共起語（→）
慣用句・ことわざ
5. 位相：語種：和語・漢語（→）
待遇上の制約；謙譲語、丁寧語、尊敬語（→）
媒体の制限：話し言葉・書き言葉
話し手の制限：男言葉・女言葉；専門語
語感：雅語、俗語など
6. 例文（意味／形態／統合的用法ごとに）とそのスロベニア語訳

このように、日本語学習者のための辞書に記載したい情報は字についてのものから語、用法、位相についてのものまで、広範囲に渡るが、少人数で授業の傍ら編集する企画では、これらを網羅して辞書を出版できるまでには長年かかるだろう。そこで、基本的な語彙とそれらの最小限の記述から編集を始め、作成したものから漸次提供できるように印刷せずにファイルのまま電子辞書として配布することにした。辞書の想定利用者は当学科の初級から上級までの日本語学習者なので、初級の教科書の語彙から編集を始め、最終的には日本語能力認定試験の1級の約1万語語彙と常用漢字を採録する予定である。

4. 辞書の形態

辞書を引くことは、自分の経験からみても、学生の辞書の利用を調べた調査（フメリヤク1996）の結果からみても、大変な手間がかかる作業である。そのため、できるだけその手間を省くような辞書の設計を試みて、ウェブブラウザで検索できるHTML形式を選んだ。このような電子辞書は、ページの制限がなく必要な情報を網羅できると同時に、語彙・漢字の網を反映するハイパーテキストなので、様々な項目内の情報から検索が可能である。また、利用者に応じて必要以上の紛らわしい情報を表示しないように設定し利用者のレベルに必要な情報だけを提供することもできる。

電子辞書には、このような利用の便利さの他に、利用者の視点からみればインターネット感覚で楽しく辞書検索ができるという利点も考えられる。辞書を引く作業が簡単で楽しければ、学生が知らない字や語をどんどん調べて覚えるということも考えられる。Laufer (2000) によると、英語学習者が同じ学習英英辞典の書籍版と電子版を使った実験では、電子版で調べた単語の方が長く記憶に残ったという結果が出たという。

その理由としては、検索する単語を一文字一文字入力したので体で覚えたという可能性と、電子検索の方が書籍辞書を調べることより簡単なので、電子版を使ったグループの学生の方があきらめず知らない単語を全部調べたのに比べて、書籍版を使ったグループの学生は検索を途中であきらめたという可能性があげられている。

当学科の学生も書籍の辞書より電子辞書を好んで使うようだが、特にインターネットから無料ですぐ手に入る辞書に人気があるようである。従来の書籍辞書と比べれば、ワープロで宿題を書いているときワープロから離れないですぐ簡単に単語が調べられることはやはり魅力的だろう。しかし、この辞書は、基本的に読解のための補助にすぎない。一つの日本語の単語に英語の単語が2つ・3つぐらい並べてあるだけで、例文などの情報がほとんどないので、作文の際に利用することには問題がある。例えば、この辞書を使って「その原爆はまずやとべでした。」という文を書いてしまった学生がある。これは、「first」を検索し「まず - at first」などの項目を、「and」を検索し「や - and」などの項目を、「last」を検索し「どべ - last (in a contest) (sl)」などの項目を見つけ、安易に上の文を作ってしまったらしい。

この例からもわかるように、辞書には訳語の他により充実した情報が必要であり、また、学生には辞書の使い方の指導、辞書から得られるものと得られないものを意識することが必要だということがあきらかである。そこから、充実した辞書の編集を試みると同時に、学生に辞書編集に参加してもらい、辞書利用の過程を意識してもらうことにも意義があると考え、現行の編集計画をたてた。

5. 編集計画

最初の段階では日本語ワープロの練習もかねて語彙リストを学生に分担し入力してもらい、各自に入力した語彙の一部をインターネット上検索し例文を集めてその例文を母語に訳してもらった。この過程では単語の意味を対訳辞書からだけでなく、例文からもその用法を把握することが有意だと学生にも分かってもらえたと思われる。

次の段階としては、集めた語彙と例文を書き込み可能なHTMLファイルとして配布し、1年間の日本語の勉強を通じてその辞書を使ってもらい、採録されていない語彙などの情報をたしてもらっている。学生が集めた資料からは学生の勉強のしかた、辞書の使い方についても貴重な情報がえられ

るだろう。そして、その資料をもとに辞書のファイルを編集し直し、学生にまた配布し、使いながら書き込んでもらう予定である。この過程をくり返すなかで、少しずつ充実した辞書ができあがっていくと期待している。

参考文献

- 国広哲弥 1980 「用例中心の国語辞書」『月刊言語』5号
シャープ, P. (Sharpe, Peter) 1993 「外国人のための日本語辞典」『月刊言語』5号
玉村文郎 1990 「辞書」『講座日本語と日本語教育、第7巻、日本語の語彙・意味（下）』明治書院
玉村文郎 1995 「外国人のための日本語辞書構想」『月刊言語』6月号
中道真木男 1983 「日本語教育の基本語彙とその辞書」『日本語学』6月号
中道真木男 1991 「副詞の用法分類－基準と実例－」『日本語教育指導参考書19 副詞の意味と用法』国立国語研究所, pp. 111-186
フメリヤク、クリスティーナ 1996 「日本語学習者の辞書使用における実体調査」『日本語教育方法研究会誌』3/1
Laufer, Batia 2000 'Electronic dictionaries and incidental vocabulary acquisition: does technology make a difference?' in "The Ninth EURALEX International Congress Proceedings vol. II", Universitaet Stuttgart, pp. 849-854